日本語教育および日本文化教育における俳句とかるたの活用: 台湾における高校生俳句かるた大会の報告

Haiku and Karuta in Japanese Language and Culture Education: Focusing on the All Taiwan High School Haiku-Karuta Competition

泰田 伊知朗
Ichiro Taida
東洋大学
Toyo University

The first high school student Haiku-Karuta competition was held at I-Shou University, Kaohsiung, Taiwan, in May 2017. *Haiku*, which is a traditional Japanese cultural form, is widely known abroad, and *karuta* is often used in Japanese language educational institutions. Our competition event is a fusion of these two kinds of Japanese cultural traditions, i.e. haiku and karuta, and 61 high school students participated in the game. The competition contributes to the reception and diffusion of haiku and karuta in Taiwan. Also, the educational merits of the competition involve students having to concentrate on listening to and reading Japanese traditional poems. The fusion is immensely useful in learning Japanese language and culture. In this paper, we will describe the competition in detail.

2017年5月、台湾高雄の義守大学で第1回高校生俳句かるた大会が開かれた。日本の伝統文化である俳句は海外でも広く知られており、またかるたも日本語教育のなかでしばしば使われている。俳句とかるたという2種類の日本文化を融合させた本大会に7校の高校生、61名が参加した。当該大会の教育的意義は主に以下の3つである。1. 俳句を集中して聞き、該当する札を見つけるという訓練を通じて得られる日本語能力の向上、2. 日本文化の理解の促進、3.　チームワークの重要性に対する認識。また本大会の開催を通じてこれらの日本の伝統文化の受容と普及へとつながることが期待できる。本論では、この大会について詳細に報告する。この報告が俳句とかるたを用いた教育の参考例となり、台湾に限らず各国での日本語・日本文化教育がより一層充実したものになればと考えている。

はじめに

俳句は日本国内にとどまらず、海外でも広く知られている(佐藤 1991; 沈 2011)。例えばアメリカの小学校の英語教科書では、日本の俳句の英訳や英語俳句が収録されている。また日本航空の主催で「世界こどもハイクコンテスト」が開かれており、2017年で第15回を数える(沈 2011: 86)。台湾の台北俳句会は2015年で45周年を迎えた歴史ある会で、2003年には台湾俳句で使われる特有の季語を収録した黄霊芝著『台湾俳句歳時記』(2003)も出版された。台湾の俳句事情については、磯田 2012、西本 2015、鳥羽田 2016などが詳しい。

俳句とは別にかるたという伝統文化が存在する。かるたも海外に伝わり、日本語教育の授業で百人一首が取り上げられている。[1]また日本語教材出版社大手、スリーエーネットワークが「みんなの日本語かるた」を作成しホームページで公表しているため(2018年6月1日現在)、このかるたも日本以外で使われている可能性は高い。

さる2017年5月、台湾高雄の義守大学で俳句をテーマにした2017義守大學全國高中生台灣俳句歌牌大賽と銘打ったかるた大会が開かれた。この大会は日本語を学ぶ高校生を対象としたものである。本論文ではこの大会について詳細に報告する。

俳句とかるたという2つの伝統文化を一度に体験できるこの企画は、日本語教育界において極めて珍しく、日本文化の受容、伝播という側面から考えても有意義であり、教育効果も期待される。日本語学習及び日本文化の習得に効果があることは、大会後の調査でも明らかになった。また今日アクティブ・ラーニングの日本語・日本文化教育への導入が推進されているが(例えば銭坪 2014、高嵜・都 2016を参照)、このアクティブ・ラーニングにかるたの使用が合致することが指摘されている。[2]

かるたを日本語教育に取り入れる試みは、上記の百人一首の例の他にも鶴町 2008、泰田 2010、三谷 2014などで報告されているが、俳句かるたの例は珍しい。またこの報告は日本文化を体験でき教育効果が期待されるアクティブ・ラーニングのアプローチに立った教育の実践報告でもある。この報告が俳句とかるたを使った教育の参考例となり、台湾に限らず各国での日本語・日本文化教育に寄与できればと考える。

義守大学応用日本語学科と大学生俳句大会について

台湾の高雄に位置する義守大学は1986年に開校し、応用日本語学科は2002年に設立された。当該学科は総面積386.4㎡の和風教室を有し、その一角を44畳の畳部屋が占めている。別の一角には4.5畳の茶室がある。この和風教室では様々な文化体験が行われている。例えば浴衣の着付け体験や、百人一首やイロハかるたなどである。

その他、応用日本語学科主催で大学生俳句大会(日語俳句比賽)が2010年から開催されている。大会ではテーマの決まった「題詠」と、特に決まったテーマのない「雑詠」の2部門で俳句が募集される。「題詠」に関しては、規定の季語を入れなければならない。表1はこれまでの大会の概要をまとめたものである。参加校数と投句数は第 1 回から6

回までは鳥羽田 2016: 186-187を参照し、第7、8回については筆者が『ゆうかりぷたす』を参照して数えた。

写真1:かるた大会の試合会場となった和風教室

表1:大学生俳句大会年譜

回数	年度	参加校	投句数		「題詠」で指定された季語
			題詠	雑詠	
1	2010	11	71	78	粽子(ちまき)、蟬(せみ)、扶桑花(ハイビスカス)
2	2011	15	105	162	鳳凰木、羽抜鶏、蚊、汗
3	2012	16	112	143	雲の峰、緑蔭、薫風
4	2013	13	127	119	春惜しむ(はるおしむ)、水温む(みずぬるむ)、目借時(めかりどき)、四月馬鹿(しがつばか)
5	2014	11	132	168	牡蠣(かき)、マスク、蜜柑(みかん)、北風(きたかぜ)
6	2015	13	82	97	春の星、落葉(らくよう)、春燈(しゅんとう)、冬の蝶、山眠る、立春(りっしゅん)・ぶらんこ
7	2016	13	95	124	雪女、風邪、清明、蛇穴を出づ、躑躅(つつじ)、情人節(バレンタインデー)
8	2017	16	145	181	栗、年玉、梅、陽炎

大会実行委員長で義守大学応用日本語学科専任講師の花城可裕氏が中心となり、雑誌『ゆうかりぷたす』が毎年発行され、[3]俳句大会に投稿された全ての句、および評者の寸評、俳句に関連する小論などが紹介されている。この大会は、対象者が大学生と若く、今後の俳句界を担う人材を育成する機会になることから、台湾のみならず日本の俳句界からも期待が寄せられている(例えば鳥羽田 2016: 191-192を参照)。

かるた大会開催

筆者は、応用日本語学科の特色を生かし、この和風教室で高校生のためのかるた大会をすることを提案した。当初は百人一首やイロハかるたを使うことも考えたが、最終的に花城氏の提案で俳句大会の俳句を使ったかるたを作り、それを使ったかるた大会を開催することとなった。

まず花城氏がこれまでの大会で投稿された俳句を中心に、五十音の「あ」〜「わ」を頭に持つ44句を選んだ。花城氏は大会用に作られた俳句一覧表「台湾学生俳句かるた稿(現代語訳版)」の中で、以下のように述べている:「『台湾学生俳句かるた』の俳句は、義守大學應日系が主催した俳句大会及び、日本の俳句大会に於いて受賞した台湾の学生の俳句を中心に選んだものである。極力、学生俳句から選句したが、無いものは台北俳句集と自作から選出した。『ぬ』は無かったので芭蕉の句を仮初めに収録した。五十音の内、『を』と『ん』は無し」。

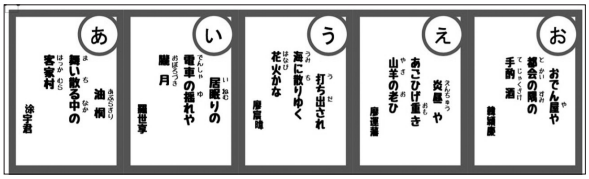
表2では例として「あ」〜「こ」の句を紹介する。

表2:かるたとして使用された俳句の例
(句の後は作者名)

あ　油桐舞い散る中の客家村　涂宇君
い　居眠りの電車の揺れや朧月　羅世享
う　打ち出され海に散りゆく花火かな　廖宸暐
え　炎昼やあごひげ重き山羊の老ひ　廖運藩
お　おでん屋や都会の隅の手酌酒　韓穎慶
か　枯蔦や落書き残る煉瓦塀　劉奕辰
き　金の汗きらりと見せる祖母の皺　劉佳欣
く　曇りたる玻璃戸の奥の冬篭り　花城可裕
け　月琴のしばし途絶えて夜来香　花城可裕
こ　後悔は心に置こう若葉道　廖曉蘋

これらの俳句と作者名を適当な大きさで印刷し(8×6㎝)ラミネートで覆い、かるたを作った。百人一首などを除けば、通常かるたの取り札には最初のひらがなと絵が描かれていることが多いが、今回は時間と予算の関係から読札と取り札を同じものにした。

写真2:俳句かるたの例



ルールを作る際は、東京都葛飾区で開催されている「かつしか郷土かるた」の競技大会用ルールを参考にした。このルールは「かつしか郷土かるた」のホームページで公開されている。

では高校生俳句かるた大会の特に注意すべきルールをまとめてみよう。最大3人までが1チームになり、2チームで勝負する。各チームは、試合ごとにメンバーを変更でき、全メンバーは3人以上でも構わない。読み手は会場に

1人で、大学生の審判と進行係が1人ずつ各試合のコート（およそ畳１畳）に配置される。

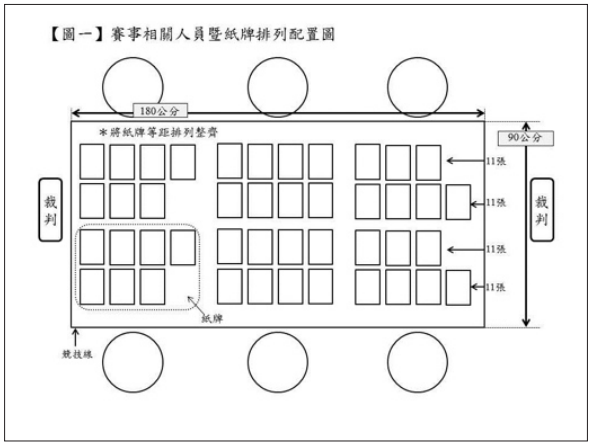


写真3:札の並べ方と座る場所の説明[4]

写真4:実際の試合の様子

競技の進行方法はまず44枚の取り札を2つに分け、各チーム22枚並べる。各チーム中央の仕切り線から11枚ずつ2列で並べ、計4列で並べる。かるたを並べ始めてから5分間を記憶時間とする。[5]

読み手は、はじめに「それでは、読みます」と言い、競技を始める。読み手は、１枚目の札を読み上げ、2回読む。各コートの審判はもう1度、取った札が正しい札か確認する。全てのコートで札が取られたことを確認したら、2枚目の競技を始める。

札が最後の2枚になったら、どちらの陣の札が残っても、場の中央に並べ直す。各組代表者1人を決めて、陣の真ん中に座り、2枚の札は各組の代表者から均等の距離になるよう並べる。読み手が読み、その札を取った者が残りの札も取ることができる。最後に枚数を数え、同点の場合は「た」の札を持っている側が勝ちとなる（台湾の「た」）。

以上が基本的なルールと試合の流れであり、より詳細なルールの中でも特に重要なものを以下で紹介する。

- お手つきした場合、すでに取った札の中から1枚相手に渡す。チーム内の2人以上がお手つきしても相手に渡す札は1枚で、両方のチームがした場合は札を渡さない。札を持っていない場合は「借り」とし、札を取ったら相手に渡す。
- 取り札の位置は最初の場所から変えられない。
- 札が読まれるまでは、仕切り線から手、顔、体を出してはいけない。
- 札に複数の手が重なった場合は、1番下に手を置いた者が取ることができる。不明瞭な場合は審判が審査するが、手が同時の場合は、読まれた札のある陣の側が取る。[6]
- 予選勝ち抜けについて:①勝ち数が多い上位2チーム。②①で決まらない場合は全試合で取った札を合計し、多いチームが優先的に勝ち上がる。③それでも決まらない場合はジャンケンで決める。

大会当日

大会には7校20チーム、61名が参加した。予選では4ブロック（各5チーム）に分かれ、できるだけ同一校が同一ブロックに入らないように配慮した。各ブロックの中で総当たり戦をおこなった。各ブロックでは1度に4チームが2つに分かれて試合をする。残りの1チームは休憩である。1度に10コートで試合が行われ、予選リーグは約１時間で終了した。

続いて決勝トーナメントで、組み合わせ抽選、準々決勝、準決勝、決勝と3位決定戦が行われた。準々決勝では予選各ブロックの１位だったチームと、各ブロックで2位だったチームが対戦するよう抽選が行われた。

決勝戦が終わった後、賞状が作成されるが、その間に高校生には花城氏による俳句に関する講演があり、その後閉幕式で終了となった。

また試合以外にもイベントが行われた。予選中は試合がないチームもあるため、そうした参加者のために会場脇の茶室でお茶をたて、高校生たちに日本茶を楽しんでもらった。また決勝に残れなかった参加者のために、決勝トーナメント中は別室で華道体験を行った。

大会後:参加者からの提言

2018年1月に、大会の参加者（指導を担当した教師と参加した生徒）にこの大会に関するアンケート調査とインタビュー調査を行なった。最初にアンケート調査結果を示す。

アンケート調査の結果

教師と生徒へのアンケート調査結果は以下のとおりである。回収できた数は、教師に関しては3人、生徒に関しては10人と少なかった。教師へのアンケートと生徒へのアンケートの内容はほぼ同一である。各質問に対して5段階で答えてもらったので、5点満点の平均点を記す（教師、生徒）:

① 大会の満足度（4.7、4.2）
② 大会の規則・内容（4.3、3.9）
③ 交通アクセス（4.3、3.9）
④ 開催時期や日程（4.3、4.3）
⑤ スタッフの対応（4、4）

⑥ 会場の設備（4.7、4.4）
⑦この大会もしくは類似の大会に参加したいか（4.7、4.1）

アンケートには自由記入欄があり、そこに書かれてあった生徒の意見を紹介する。まず教育効果については、日本語の聞き取りや発音の練習になったこと、日本文化を理解できたこと、チームワークを学べたこと、集中力や反応する能力の養成などが挙げられた。その他にも他校との交流や茶道体験が好意的に受け止められていた。逆に問題点として、審判のルール認識不足、ルールの説明不足、他校との交流が少なかったことが挙げられた。

インタビュー結果

3人の教師が上記のアンケートに答えてくれたが、そのうち2人の教師（AとB、別々の学校の教師）には、アンケートの内容に基づいてこの大会に関するインタビューを行った。もう1人の教師（C）に関しては、回収したアンケートの自由記入欄で意見をいただいた。教師3人の意見をまとめ以下に提示する。

教師A

大会前に高校で予備大会を実施した。その前にかるたの映像を見せた。百人一首のアニメ（『ちはやふる』）のことで生徒たちは盛り上がり、3人が興味を持ち本大会に参加することを決めた。結果は予選敗退であり、悔しそうで、練習量が足りなかったことを痛感していた。大会自体には満足していた。

大会の良さは、日本語学習の区切りとなることである。それに向けて勉強し、かるたを練習し、その成果をここで発表することができる。またこの大会は日本語の練習にもつながる。特に聴解に関しては効果があった。またかるたを読ませたので日本語を読む練習にもなった。さらに日本文化を学ぶ効果もある。俳句を通じて日本の文化と歴史にも高校生は興味を持ったようだった。

指導上の困難な点に関しては、教師自身にかるたや俳句の経験がなければ、生徒に説明することが難しい。またそれらの歴史についても教師に知識がなければ説明できない。

今後については、定期的な開催を望む。生徒が足りないところを認識し、もう一度頑張る気になるからである。またより多くの高校に参加してもらいたい。自分のフェイスブックで大会当日のことをアップロードしたところ、台湾北部の高校の教師が反応し、今回は出られなかったが、次回は出てみたいということであった。また平日に開催されたため出られない生徒もいたので、開催日についても再考してほしい。

教師B

大会に関しては大変満足している。五七五というリズムで俳句を聞いてかるたを取るという、生徒にとって貴重な体験ができた。また専門家（花城氏）の説明も有意義であった。

生徒もまた来たいと言っている。準決勝で負けた時に泣いた生徒がいたのだが、勝ったチームが慰めてくれた。学校間の交流も全国大会ならではであろう。また読み手の日本人とも触れ合うことができた。通常の授業では触れることのない俳句を学ぶことができたのは大きかった。俳句の存在を生徒はほとんど知らず、かるたはアニメで見たことがある程度だったので、2つの文化を体験できたのは良かった。

大会の意義は生徒の視野を広げることにある。高校生にとっては新しい分野で、教養も身につくであろう。俳句の季語を通して日本人の季節感を学び、いつか日本に行ってみてそうした季節感を体感できればと思う。またこの大会をきっかけに、自校の生徒には畳の縁を踏まないというマナーを教えた。

今後については、参加校がより多い方がいい。YouTubeに大会をアップロードすれば、大会の認知度を上げることができる。いつかは大学部でも開催してほしい。

教師C

生徒は主体的に練習し、大会の準備に集中していた。2チーム参加し、1チームは好成績を収めたが、もう1チームはそうではなかった。審判の大学生にも問題がある。対戦の際に誰が先に札を取ったか審判が判断できない場合があり、頻繁にじゃんけんで決定したが、生徒は非常に不満に感じていた。統制のとれていない大会ならば、わざわざ参加する価値はない。審判には、より多くの訓練をしてほしい。

このような問題はあったが、好成績を収めたチームは表彰後とても喜んでいた。みんなで泣いていることは初めてで感動を覚えた。この大会は高校生の日本語学習の動機となるし、別の学校にもレベルの高い生徒がいることを知るきっかけになる。今大会を通じて得るものも多く、すでに第2回大会に参加する準備もしている。日本語を学ぶ高校生のためにもこの大会を継続してほしい。

まとめ：本大会の意義と今後への課題

このように大会に参加した教師および生徒が、日本語・日本文化学習への貢献、チームワークの体得などの効果を認めている。さらに全国大会ということで学校の枠を超えた高校生同士の交流の機会となったという点も見逃せない。

様々な地域からの高校生が俳句とかるたを学び主体的に取り組んだことから、台湾各地で俳句とかるたの受容と伝播が広く行われたと予想される。その高校生が一箇所に集い交流することで、彼らにとって2つの文化はより一層印象深いものとなっただろう。

改善すべき点はまず審判のレベルの向上である。今回は本番の1週間前に1度大学生による模擬試合を行い、そこに審判担当の大学生たちを集めて審判の練習をしたが、それでは不十分であった。そのため試合当日になっても審判が読まれた札に反応することが難しかった。その指摘は参加者（高校生と指導教師）からも審判の大学生たちからもあった。審判にはできるだけ多くの練習の機会が必要であろう。

また、より多くの高校生に参加してもらうために宣伝方法も重要である。例えばアニメ『ちはやふる』を意識した宣伝方法もおもしろい。『ちはやふる』が日本で競技かるたの普及に役立ったことは知られている。例えば2017年8月1日版の『朝日新聞デジタル』では、第41回全国高校総合文化祭「みやぎ総文」の競技かるた部門に関して、『ちはやふる』に影響されてかるたを始めた女子高校生が紹介

された。『ちはやふる』は台湾では『花牌情縁』、英語版は *Chihayafuru*でコミックスが出版されている。特に若い日本語学習者へのアニメの影響が甚大であることは、日本語教師なら誰も否定しない。『ちはやふる』の人気に便乗するような形で、高校生たちに宣伝することは効果が見込めるであろう。

このかるた大会のかるたは義守大学応用日本語学科のホームページにアップロードされている(2018年6月1日現在)。

前述のようにこの報告は、日本文化を体験でき教育効果が期待されるアクティブ・ラーニングのアプローチに立った教育の実践報告である。この俳句かるたが台湾に限らず各国での日本語・日本文化教育に貢献できることを期待したい。

注

1. アメリカのミシガン大学の百人一首大会についてはJapanニュース倶楽部のHP参照:http://www.japannewsclub.com/2015/01/世界に広がる百人一首～ミシガン大学キャンパス/(2018年6月1日アクセス)。台湾に関しては、淡江大学の内田康氏が「日本語教室活動の中の百人一首かるた～その可能性～」と題して2015 年度第 3 回日本語教育研修会で講演されている。
2. 特に外国人を対象とした日本語・日本文化教育でのアクティブ・ラーニングとかるたの関連については、例えば膽吹(2013)を参照。また2016年8月24日に東洋大学文学部主催で国際交流プログラムの一環として創作かるた講座が実施され、その講座の担当教員は以下のように述べている:「現在、文科省が盛んに言っております、教科横断型の学習であり、まさにアクティブラーニングのよい例として参考にさせて頂きました」(Karuta 2020: Global Education through KarutaのHP:http://karuta2020.tokyo/news/160825-2/[2018年6月1日アクセス])。
3. 『ゆうかりぷたす』は2010年から発行が開始され、2013年と2014年は発行されていない。この間に開かれた第4、5回の俳句大会については、第6回大会と合わせて2015年の『ゆうかりぷたす』第4号で報告されている。
4. 座り方に関しても、かつしか郷土かるたのルールを参考にした。
5. 実際の大会では進行具合の関係上、記憶時間をあまり取ることができなかった。
6. なお実際の試合では審判が判断できない場合も多く、じゃんけんで決めることもあった。

謝辞

本研究を進めるにあたりご協力いただいた義守大學應用日語學系の花城可裕専任講師、助手の陳佳慧氏と謝怡凡氏、またアンケート及びインタビュー調査にご協力いただいた方々に感謝の意を表したい。

参考文献

磯田一雄(2012).「戦後台湾における日本語俳句の進展と日本の俳句結社―『七彩』・『春燈』・『燕巣』とのかかわりを中心に―」『東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研究所)』57, 1-14.

膽吹覚(2013).「『日本事情』におけるアクティブ・ラーニング―『越前若狭いろはかるた』を使用した授業の紹介―」『共通教育フォーラム』15, 2-3.

黄霊芝(2003).『台湾俳句歳時記』東京:言叢社.

佐藤和夫(1991).『海を越えた俳句』東京:丸善.

沈美雪(2011).「世界に広がる俳句」『ゆうかりぷたす』2, 75-87.

銭坪玲子(2014).「インターネットを活用した日本語学習 : 日本語教育におけるアクティブ・ラーニングの試み」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』12(1), 9-18.

泰田伊知朗(2010).「日本文化を教える授業の一例:イランにおけるカルタを使った授業」『ゆうかりぷたす』1, 46-48.

高嵜幸子・都恩珍(2016).「海外の日本語学習者に日本文化をどう教えるか:アクティブラーニングを取り入れた授業の試み」『桜花学園大学学芸学部研究紀要』8, 115-127.

鶴町佳子(2008).「中・上級の成人学習者を対象とした『かるた作り』活動」『第31回日本語教育方法研究会予稿集』50-51.

鳥羽田重直(2016).「台湾の俳句事情」『国際日本文学研究集会会議録』39, 177-193.

西本綾乃(2015).「台北俳句会に参加して～台北俳句会45周年に寄せて～」『交流』891, 1-8.

三谷絵里(2014).「初級日本語学習者を対象としたカルタ活動とその試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29, 119-132.

泰田 伊知朗(たいだ いちろう):東洋大学国際観光学部准教授。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士(文学)。2005年より台湾の高雄にある義守大學應用日語學系で教鞭を執る。2018年より現職。主な研究テーマは、日本語教育、古代ギリシャの叙事詩、日本における西洋古典の受容史などである。

Ichiro Taida is an associate professor at Toyo University, Japan. His research interests include Japanese Language Education, Greek epics, and Classical reception studies. He received his PhD from Hokkaido University in Japan in 2005 and then taught at I-Shou University in Taiwan. He has over 12 years of experience of teaching Japanese in Taiwan, and now teaches Japanese to foreign students in Japan.